

土岐氏について

土岐氏は、清和天皇を祖とする源氏の一族で、江戸時代になってからは、大坂城代・京都所司代・老中などを務めた名門です。

土岐頼稔(よりとし)公が寛保2年(1742)黒田氏の後を受けて沼田藩主となって以来129年間、12代藩主頼知(よりおき)公が、明治2年(1869)の版籍奉還、明治4年(1871)廃藩置県の日まで利根沼田地方の主要地域を治めていました。

明治4年(1871)に沼田を離れ東京に転居した土岐氏は、明治新政府から子爵に叙せられました。この洋館は、土岐章(あきら)子爵が関東大震災後の大正13年(1924)に東京の渋谷へ転居する際に、住宅の主要部分として建築されたものです。

当主の實光(さねみつ)氏より、ゆかりの深い本市が寄贈をうけ、平成2年8月に沼田公園へ移築しましたが、時が経ち、保存修復・活用を図るため令和2年3月上之町に再移築となりました。



土岐頼稔座像(館内に展示)

■利用案内/開館時間：午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日：水曜日・祝日の翌日
年末年始(12月29日～1月3日)

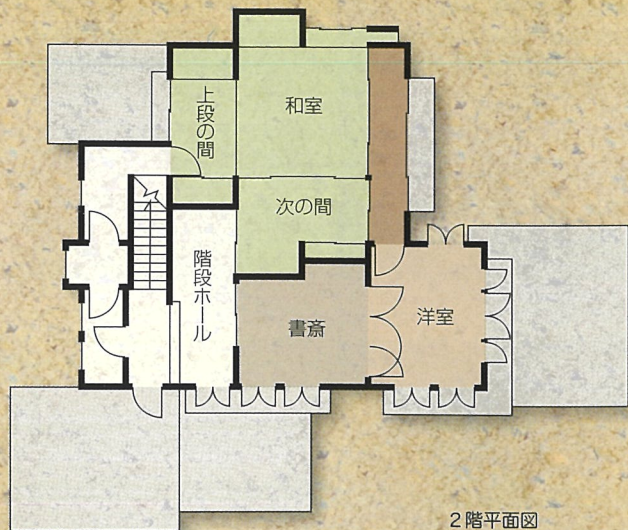
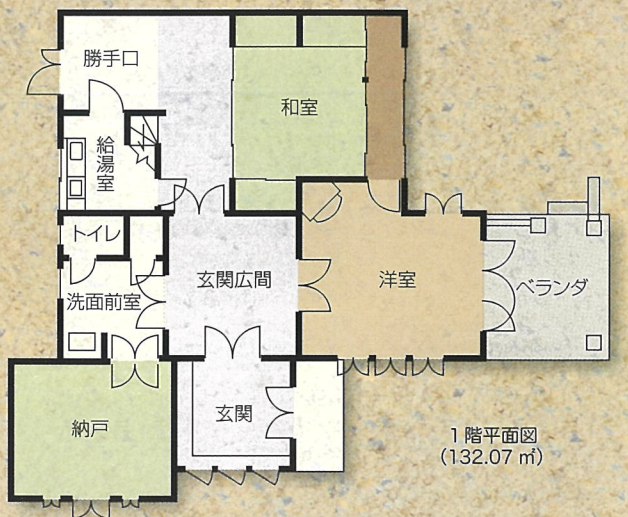
■観覧料/個人……………110円、団体(20人以上)……………60円
※中学生以下の方並びに身体障害者手帳、療育手帳または精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその付き添いの方1人は無料。



旧土岐家住宅洋館

〒378-0047 群馬県沼田市上之町1160-1

Tel.0278-22-3110(生方記念文庫)

2階平面図
(89.07㎡)1階平面図
(132.07㎡)

- 施工/大正13年(1924年)
- 再移築/令和2年(2020年)
- 構造/木造2階建
- 面積/1階132.07㎡
2階89.07㎡
- 屋根/天然スレート葺き
北側屋根に「牛の目」窓配置
- 外壁/基礎 自然石乱積張
1階 色モルタルリシン掻き落し(ドイツ壁風)
2階 アメリカ風下見板張ペンキ塗

旧土岐家 住宅洋館

きゅうとぎけしゅうたくようかん

The old Toki's house
European-style building

旧土岐家住宅洋館

大正期を代表するドイツ風住宅

平成9年11月5日国の※登録有形文化財(建造物)に登録されました。

大正13年(1924)建設。
 木造2階建屋根裏部屋付、天然スレート葺建築の洋館。
 江戸時代に沼田藩主を勤めた土岐家の東京渋谷にあった邸宅の洋館部を
 平成2年に沼田公園に移築、その後令和2年に現在地に再移築したもの。
 外観は洋風だが、内部は和風と洋風の両方の要素をもつ建物。
 大正期の大邸宅に建てられた洋館の好例である。

▼ドイツ風壁



■様式的特徴

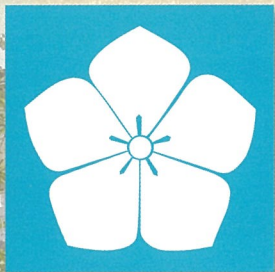
大正末期から昭和初期にかけて特徴的にみられたドイツ郊外別荘風住宅。屋根窓に(俗に「牛の目」窓と称される)は、1階のドイツ壁風の仕上げと合わせ、様式的特徴の精髓となっています。

土岐氏の家紋は桔梗の花をモチーフとした桔梗文と呼ばれるものです。桔梗の花は、沼田市の市の花でもあります。



▲桔梗の花

▼桔梗文



※文化財登録制度は、文化財を事業展開や地域の活性化のために積極的に活用しながらゆるやかに守っていくという国の制度で、建設後50年を経過した建造物のうち国土の歴史的景観に寄与しているものなどが対象になります。



▲屋根「牛の目窓」



▲2階和室と上段の間



▲2階洋室

■建築史的価値

我が国に遺された大正末期の遺構は少なく、これらの中でも、とりわけ時代の特徴を示している貴重なものです。



▲ドイツ風デザインの階段親柱

■生活史的特徴

明治以降の近代日本を形成する過程で特有の役割を果たした旧大名家の近代以降の生活を知る生きた資料です。



◀1階洋室

▲1階和室

▼1階洋室暖炉



■平面的特徴

玄関広間の最奥に設けられた両開扉を境に、接客空間と私的空間が明快に分離されています。明治期の独立した洋館から、昭和初期の文化住宅(応接空間を小規模の西洋館として玄関脇に設置する)への過渡期を示す特徴を有し、部屋の間取りも土岐子爵の接客内容をよく伝えています。